
どこにでもあって、どこにでも無い話

天海雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこにでもあつて、どこにでも無い話

【Nコード】

N5755M

【作者名】

天海雨月

【あらすじ】

どこにでもあつて、どこにでも無い話です。

主人公がコールドスリープみたいなことになって、未来で繰り広げるドタバタみたいな話です。そんな話だったらいいなあと思います。

どっかの話に似ているかって、そんなこと気にしない！

ブローグ 式典 招かざる客（前書き）

ちくしょう、こんな小説で世の中が変われたらいいなあ
o r z o r z 何これ

プロローグ 式典 招かざる客

プロローグ

「これでよし」

「何がこれでよしだ。くそ、離せ」

「大丈夫だって、父さんを信じな」

「てめえ、この状況でどう信じればいいんだ」

「なに、たかが実験台になつてただけじゃないか」

「何さらつと言つてんだ。実験台？聞いてねえよ。実験は成功だつて聞いたから・・・」

「あ、ごめん。あれ、嘘」

「てめえー」

「大丈夫だつて、この説明書を見る限り、こうすればいいんだから」
「てめえが、今見てるのつてパラレルワールドに行く少年の漫画だろうが。お前四十になつてもそれか」

「息子よ、何も分かつていないな。お前を別にパラレルワールドに行かそうとは思っていない」

「え、じゃあ何のために」

「コールドスリープが自宅でも可能か、調べてるだけだ」

「おいー。なおさらやめろ」

「何を言っている。もういい、これで最後じゃないからな。ちゃんと二十五年後に目を覚まさせてあげるから」

「おい、だからちよつと待て」

そんな少年の叫び声も空しく、父さんと呼ばれた人間は何かしらのスイッチを押した。その少年は深い眠りへと誘った。男は狂気を拳げた。実験は成功したのである。

「やったー。家庭でもコールドスリープが可能だ。やつほー。二十五年後が楽しみだな。俺、老けてるだろうな、ハハハハ・・・ハ？」
男は突然慌て始めた。そして、二十五年という数字を注意深く見た。

どつやら眼鏡を掛けずに押していたらしい。眼鏡を掛けてよく見た。

「二千五百年後？あ、しまった。数字押し間違えた」

ブローグ 式典 招かざる客（後書き）

はい、ふざけた内容になりました。

式典（前書き）

ちくしょう、こんな自分が投稿してすいませんでした。

式典

「ヤシャル様、そろそろお時間です」

背の高い付き人がヤシャルという少女のそばで彼女を見守っていた。彼女は今王位継承を受けることになっていた。先代の王が病により死亡し、彼女が女王として国を治めるのだ。

「ユライ、そんなに急かさなくても大丈夫よ。式典までにはまだ時間があるわ」

ヤシャルと呼ばれた女の子には小さな白い翼が生えていた。大人になると飛べるようになるのだが、十二歳ぐらいだと飛ぶ事も使う事もない。彼女は戦闘妖精ピクシーの一族である。もともと女だけがピクシー族であって、男はまったく違う種類である。ここ、ハルサメニアでは戴冠式及び式典が開始される。この式典には数多くの王族が来て、新たな王を閲覧する場所でもあった。

「ヤシャル様、何事も早くするのが良いのです。式典は神聖なる儀式です。また、お化粧などで時間が遅れたら、クルミ様に叱られてしまいますぞ」

「クルミ姉様に叱られるのはよくない。わかったユライ、御主の言う通りにしよう。で、何から始めたら良いのだ」

「ヤシャル様、まずは服を正装に着替えて、その後お化粧をするのです。亡き女王が今の姿を見たらさぞかし嘆かれるでしょうに」

彼女はプレntenテスという服のままだった。プレntenテスは夜に着る服で寝る時や寛ぐ時に使うのだ。

「しかし、ユライ。私はこの正装服が嫌いじゃ。こんな服では襲われた時、大変じゃろう」

「ヤシャル様。警備も万全です。しかも各国の王たちがいる前で襲

われることは無いでしょう。私が暗殺者であつたのなら夜か、この場所から移動する時に狙います」

「そうじゃったな。だが、不安で。何か嫌な予感がするのだ」

「ヤシャル様、女王という立場になられるお方がくじゃや、くだを使わないで欲しいのです。もつと無邪気にしてくれませんか」

「ユライは敵しいのう。別に良いではないか、こんな語尾いちいち誰が気にする」

「でも、それじゃ、あたしの立場はどうなるの」

そこへヒールという服で来た女の人が入ってきた。ヒールとは平民が好む服で破れない、縮まない、臭くならないの三つの要素が入っている最高の服なのである。女の人用は白とピンクが混じった服で、男の人用は青と黒が混じった服で出来ている。

「これは、クルミ様。あなたも早く王族の格好をお願いします」

「でも、あたしは式典にはでないのよ」

「それでもクルミ様は王族の人間です。さあ、王族の服を着て下さい。シランサー様に任せるので、早く仕度して下さいね。シランサー様、では後をお願いします」

厳格な雰囲気をした老婆が入ってきた。彼女はシランサーと呼ばれ、長年この二人の姫に使えてきた従者なのである。

「さあクルミ様、ヤシャル様、仕度をお願いします」

「わかった、婆や。ところで婆や、この式典に来る王族はわしらの他に誰が来るのじゃ。ユライは各国と言っておったが、国自体空中にあるではないか。大丈夫なのか」

「はあ、姫様。一国の主ともなる人がそのような事を言つてはこの国も大丈夫でしょうか。よいですか、我々戦闘妖精ピクシー族は知能に長けた一族です。他の者たちと違って知識だけは上ではないといけないのです」

「わかっておる。だがな、姉上とも昨日話しておったんじゃが、戦闘妖精は我々だけではないじやろう。他にもいたが、あと異次元人もくるというではないか」

「その通りでございます。我々戦闘妖精は三つの勢力があります。ピクシー、エルフ、そしてニーファンドラです。ピクシーはさきほども述べた通りに知識が長けた一族でして、どちらかというと戦闘には不向きな一族です。エルフは肉弾戦闘が得意な種族でして、まあ、いわゆる知能戦術には欠けている種族です。ただ、私は差別しているわけではありませんが、少し騎士であることに誇りを持っている変わった一族ともいいたしうか。そして、ニーファンドールは魔法に長けた一族です。ピクシーとも比較的に仲がよかったのですが、その」

シランサーはちらりとクルミを見た。

「婆や、その話はあたしがいない時をお願いします」

クルミはツンとした顔で横を向いた。どうやらあまり触れられない話らしい。

「そうですね、失礼致しました。さあ、仕度は整いました。そろそろリヴァースに着くところです」

そう言いながら、彼女は礼をして出て行った。リヴァース別名地獄の入り口とも呼ばれているぐらい危険なところである。ここは危険な人物が多々いて、無法者や賞金首が入った場合、殺されてしまうことで知られている島である。その町で式典をすることは遙か昔に決められている。いつ始まったかは知らないが、そう誰かが決めたのである。リヴァースの中央にある首都の名前がハルサメニアである。異次元人とはそのまま別次元から来た人たちである。こちらが召還することが不可能で、あちらから神隠しとかいわれる現象でくることが出来る。空中都市エアリアルは高度を下げて、港に

着いた。もつとも空中都市といっても王宮と森と湖ぐらいしかない。大きさは二千メートル、幅が千メートル、高さが三千メートルとやや大きい空中都市である。元々はフォレスト国の一部であったが、ある日どこかの科学者が空中都市というものを作りたがって、作ってしまった国なのである。港にはたくさんの船が到着していた。空中を飛ぶ船もどこかの科学者が作ったといわれている。

港に着いた頃、ヤシヤルに手を振る人がいた。その子は白髪で耳の上に跳ね上がり、ヘビ―テルを着ていた。十二歳ぐらいの子供である。

「おお、ルイス。来ていたのか」

「まあな。これからは敬語を使わなければならないのか、すまない」
「ルイス、別に敬語なんて使わなくてもいい。わしの命令じゃ、わしに対して敬語を使うな」

「承知した。ところで、それが戴冠式に使う服なのか。少し恥ずかしいなあ」

「うむ。だが、これはある科学者が発案したものでな。その科学者によれば襲われても簡単に逃げることもできるとか言っておったが、適当であろう。ところで、御主ヘビ―テルのままじゃが、それがエルフの正装なのか」

「そうだ、我々エルフは外見ではなく、内側から判断する種族だ。ダークエルフと違ってな」

ルイスはちらりと横を見た。日焼けした肌と白髪、背中には弓を背負っていた。しかし、ヘビ―テルではなく、もう少し豪華な格好である。

「ほう、あれが噂に聞く、ダークエルフが式典などに着るヘビ―テルデラックスだな。なかなか綺麗ではないか」

「そうかな。男があんなキラキラしたものを着るなんて信じられん」
「しかし、そういう御主こそダークエルフではないのか」

「あいつらとは違う。わしらセイントエルフはダークエルフのよう

に力がないわけではない。戦闘妖精エルフだぞ」

「すまん、すまん。ん？何じゃ」

彼女たちが話しているところから少し離れたところで騒ぎが発生していた。クルミともう一人の女の人が歪み合っていた。その女性は長髪のお金髪で服は垂れ下がっていて、何か気品があふれるものだった。

「あら、クルミ。こんなところで会うなんて奇遇ですわね」

「本当にね、ラルス。あなたも王位を逃したのね」

「そんなことないですよ。あたしはまだ継承権から外れてないはずなのよ。ところであなたはどうか外れたようですよ」

「あらあら、誰かさんのせいでこうなったのはご存知かしら」

「あら、誰かさんは誰でしょうかね」

睨み合い、そして両方とも腕で突っかった。

「何やつとるのじゃ、あいつら」

「わからないが、どうやら前の晩餐会の時に何かあったのでは」

「そうじゃな。おっとそろそろ時間じゃ」

ヤシャルは真ん中の道を歩いた。そこだけは深紅の絨毯が敷いてあり、皆脇へと避けた。全てではないが、ほとんどの王族が見えていた。皆この儀式をどれほど待ったのか。先代国王が死んでから国は荒れ果て、ようやく女王が選ばれたのである。ヤシャルが真ん中の道を歩いていると、先ほどクルミと喧嘩していた女性と同じような女性たちが手を上にかざし、何やら綺麗なものを天井に打ち出している。

「ほう、あれが噂に聞くニーフアンドーラ特有の極法か。なんと美しいものだ」

ヤシャルは感心しながら中央へと進んだ。彼女がちょうど真ん中にたつと、洪い感じの顔をしたおじいさんが彼女の頭に王冠を載せた。これで彼女は王となったのである。そして、人々は歓喜した。彼女は手を挙げたら、その声は止んだ。

「我ここに誓う。我国決して無駄な血を流さん、そして他国に大し

ても決して流さん。我ここに誓う、新生なる国に栄光があることに」
人々は彼女にひざまずくように座った。これが戴冠式の習わしなのである。そして、彼女はユライから赤い飲み物を受け取った。これを飲み干す事でこの戴冠式は終わる。彼女が飲もうとした、その瞬間ナイフが彼女のグラスに当り、床に飛び散った。気がつくと、そこには黒いマントを被った人がいるではないか。しかもその人が言った。

「飲むな。死ぬぞ」

式典（後書き）

ちくしょう、こんな、こんな小説

招かざる客（前書き）

くっそ、くそ、くそー

招かざる客

ヤシャルが絨毯の上を歩いていったとき、ちょうど真上に六人の黒いマントを着た奴らがいた。それぞれ背格好も違った。天井から一人の若い男の声がした。その男はフードで顔が見れない。

「ほら、来たぞ。あれが今回のターゲットだ」

もう一人の黒いフードに語りかけた。

「あの子が。なんでバニーガールの服なんて着てるんだ」

「あれが、あいつらの国では正装なんだ」

「趣味悪いな」

「そんなことお前には関係ない。それよりも彼女が赤い飲み物を飲んだ時に狙え。俺たちはここでお前を見ているからな。大丈夫だ、失敗などない。あの、背の高い奴がいるだろ」

「ああ、なんかいるな」

「あいつはおれたちの仲間だ。この計画のためにあのでしゃばりに付き従った。失敗は許されない、わかるな」

「耳にタコができるほど聞いたよ。失敗はしない」

「よし、いいか」

ヤシャルがグラスを取り、飲み干そうとした。ところが、さっき命令された男が突然ナイフを取り出し、投げたのである。

「貴様、契約違反だぞ、おい、今出て行ったら殺されるぞ」

「ほつとけ、どうせこれが終わったら殺されるんだ」

他の四人は彼を見逃したのである。ヤシャルはびっくりした、何故なら上から見知らぬ黒いフードを被った人が彼女のグラスに毒があると示唆したのである。

「御主、何者じゃ」

他の人々は騒然とした。ダークエルフは武器を構え、ユライは彼女を守ろうとした。その人物は突然棒みたいなものでユライを吹き飛ばした。

「おい、衛兵。俺を雇った奴らがまだ上にいるぞ」

ダークエルフたちは弓を構え、一斉に天井に攻撃した。すると、五人のフードを被った人物たちが降りてきた。一人は死んでおり、他の奴らは怪我を負ったらしい。ユライはナイフを投げた人物を睨みながら、叫んだ。

「殺せ、賊だ。こいつは神聖なる式典を邪魔した。姫様を狙っている、しかも私に罪を着せようとする。この飲み物に毒が入っているなどという」

その人物は笑った。この四方八方囲まれた状況で笑ったのである。

「おまえ、今自分が犯人ですって言ったようなものだぞ。俺は別にお前に罪なんて着せようとは思ってもいなかったけどな」

「ユライ？御主、何故」

すると温和みたいな顔が激変した。ヤシャルに向けた顔が憎悪でしなく、恩義があるなどこれっぽちもない顔だった。

「何故だと。貴様ら王族がいたから、我々一族は一生お前たちに使えなければならなかったんだぞ。せつかく先王を毒殺し、亡き女王を事故に転落死にしたのに、ここで計画が終わるとでも言うのか。ふざけるな。せつかくお前のようなクズを暗殺者として雇ったのに、計画が失敗だ」

すると、またしても男は笑った。高らかに笑い出した。

「悪いが、俺は頭はいいほうだね。いきなり人殺してくださいって言って殺せるほどバカじゃないさ。なんで殺すかの理由もちゃんと調べたんだぜ」

ダークエルフのごつい体をしていて、いかにも歴戦の戦士ですといった衛兵が近づいて、聞いた。

「お前は暗殺者なのか、それとも単なるフリーの殺し屋なのか」

男はさつとマントを脱いだ。そこには少年が立っていた。自分の背よりも長い金棒を持ち、ヘビータルを着ていた。

「悪いが、俺は暗殺者と殺し屋の違いがわからん。だけどパンダとシマウマの違いだったらわかるけどな」

と言ったと同時にユライを金棒で吹っ飛ばした。ユライは壁にのめり込み、血を吐いた。

「貴様、計画を……よくも……ぐはっ……何故だ」

男はにんまりとした。

「俺は密かに殺すことが大嫌いなのだ」

他の四人が男に向かって突進しようとしていた。

「よくも、計画を壊してくれたな。ここで捕まるくらいなら、貴様を殺してからだ」

「できるなら、やってみな」

自信たつぷりに言うほど男は強かった。金棒で全員を吹き飛ばしたのである。特に最初に突っ込んできた、太めの男には顔面を打ったほどである。

「歯ギヤ、歯ギヤ、ヴォレの歯ギヤ」

「おっと、俺の棒術は回転を加わらせることで破壊力をさらに上げるの言い忘れていた」

覆面がとれた四人の顔はどうやら広場にいた人々にとって顔見知りだったらしい。

「ヌレン、カジキ、マール、テンリ。お前たちだったのか」

「おや、知り合いか。これは悪いことをした」

「ふん、こいつらは学園都市の男性サムライだ。まさか、お前たちが関わっていたとはな。打ち首だけではすまないぞ」

「おい、どうすんだよ」

「あれ、あいつがいない。ギミーがいない」

ダークエルフの長とも言える人物が四人を一瞬にして捕らえてしまった。

「ギミーがいないんだって、ギミーが」

「誰だ、ギミーとは」

「さっき死んだはずのギミーがいない」

「逃げたのだろう。そんなことはどうでもいい、おい、お前、金棒使い。貴様も捕まえてやる」

男は笑みを浮かべながら、小馬鹿にしたようにダークエルフの長に言った。

「できるものならね」

二人は空中で戦い始めた。ダークエルフの長は短剣を持ちながら、金棒を防ぐのに手が一杯だった。金棒が彼の顔や腕など急所の部分を的確に狙っていた。彼は避けるのが精一杯で、攻撃などできずに防御に徹するしかなかった。それに見かねたルイスは衛兵に矢で攻撃命令をだそうとした。ダークエルフの長はそれを止めた。

「やめろ、こいつはサシで勝負しないと勝てない相手だ。矢を射れば、わしにも当る」

「ほう、さすがに強いだけあるな。だが、貴様は一つ忘れている。俺が卑怯者だということを」

ダークエルフの長がちよつと怯んだ隙に股間を狙い、体をひっくり返した。ダークエルフの長は股間を押さえながら言った。

「貴様、う、戦士の恥だぞ、げ、くー」

「俺は戦士じゃない、たんなる殺人未遂を起こしそうになったけどあえて起こさなかった人物だ」

「ならば、我ら兄弟が御主に勝負を挑む」

「おお、新参か」

一人は白髪だが、ポニーテールにしており、もう一人は短髪だった。体はがっちりしており、盾と矛を持っていた。

「我はゲンブ、盾を極めたもの」

「我はスザク、矛を極めたもの」

男は精一杯の猫撫で声で言った。

「おお、怖いね」

「そんなことが言えるのは今のうちだ。我盾は決して攻撃を通さない」

「我矛はどんな盾をも貫く」

男はにやりとした。

「知ってるかい、こういう言葉を、矛盾」

「何を言っているのかわからないな」

スザクが突いた矛が男に当りそうになったが、男は矛を後ろから来たゲンブの盾に当らせた。勢い良く盾に当り、ヒビを入れてしまった。

「何をしているスザク。我最強の盾が」

「すまぬ、兄者」

兄が弟を叱っている最中に男が回転を加えた金棒で盾が貫いてしまったのだ。もの凄い音と同時にゲンブは盾と一緒に壁に吹っ飛んでしまった。

「兄者ー」

「戦いにおいて、余所見をするなんて駄目だね」

地面にスザクを叩き付けた。金棒が彼の体を壊してるかのように骨の砕く音が聞こえてきた。

「ぐはっ、不覚だ」

ヤシャルはそんな戦いを見て、この男に興味を持った。自分より歳はそれほどではないが、歴戦のダークエルフの戦士がこうも簡単に倒されるとは彼女も自分の従者として雇いたかった。しかし、ユライの件もある。彼女はちらりと半死半生のユライを見た。先代王の仇でもあるユライをこの場で殺したかった。彼女は迷った。

「御主、わしをこの場で殺そうと思うのか」

「ふふふ、その歳でもうそんなこと考えたら、あんまり良い事ないよ」

「あたしの妹は殺させない」

ヤシャルと男の間にクルミが割って入った。クルミは王族戦闘用の服を着ていた。服の色が白い色でどこにも他の色がなかった。

「その服、リーシャンか」

「ほう、知っているのね。そう、リーシャンよ。一応念のために着ていたけど、まさか勘が当たとは思わなかったわ。ところで、あなた今の状況わかっている」

男の周りにはいつのまにかほとんどの王族護衛の近衛兵が周りを固

めていた。皆それぞれ剣みたいな武器を持っていた。

「まあ、公開処刑みたいなものだろ。でもよ、別にいいさ。自分がここで死んでも悔いはないが、お前本当に戦闘妖精ピクシーか。戦闘妖精ピクシーは戦闘には不向きだと聞いたが」

クルミの周りに黒い感じのものが纏っていた。生きているものが纏っているような感じではなかった。クルミから百戦錬磨のような雰囲気が見えた。

「お前、呪われた子か、くそんなやつが戦闘妖精ピクシーだと。ふざけんな」

彼女から発する言葉、呪われた子など男は彼女について知っているのかもしれない。だんだんとあの余裕だった男の表情が崩れていった。男はクルミに何かを感じたようだった。男は次第に壁に背を向けて、逃げるように足を徐々に後退した。

「逃げるぞ、雨月」

「ギミー？お前死んでなかったのか」

「こういうことに備えて、死ななかったんだ。俺と共に逃げろ。どうせここで捕らえられてもその馬鹿娘に仕えてしまう。俺とともに来い」

いつの間にか、男のそばにギミーと呼ばれた男がいた。ギミーという男は仮面をかぶり、両手には刀と呼ばれるものを持っていた。

「お前を信じることができるか。俺をあんな所に閉じ込めといて。」

俺は俺の力でここを切り抜ける。甘ちゃんには興味がねえよ。偽名のギミー君」

「く、せつかく俺が助けてやろうと思ったのに。その態度はなんだ。結局お前は自分勝手だ。だが、そういうお前を買っている。お前は俺のために時間を稼げばいい。ただ、それだけだ」

言い終わると同時に男に刀を突き刺した。一瞬であったが、男はにやりと笑った。

「頭がおかしくなったか、雨月。俺のためにお前が死ぬ事で俺は逃げることができる」

「お前の裏切りなんてとつくに気付いていたよ。この瞬間を待っていた」

「刀が抜けない。貴様、俺はお前と違って高貴な存在だということがわからないのか、くそ抜ける」

刀が深く突き刺さっていたようで、男から血が体から溢れ出た。だが、ギミーは彼から逃げられないのである。

「こうなったら父上に貴様の首を手みやげに今回の失態を見逃してもらおうまでだ」

「そんなことするまえに自分の危険を考えておくべきだったな」

男は金棒でギミーの腹に穴を開けた。そこから銀色の血が滴り落ちた。

「やっぱり銀色の血か。予想通りだな。お前、ユニコーン族だろ。獣人で貴族口調しかもさつきできた穴がこつも簡単に修復されていく。となると、あの一族ということになるな」

「お前の仕打ちは許さない。今度会ったら殺させてもらう。あばよ、ギミーは煙玉のようなもので姿を消した。」

「出入り口を塞げ。絶対に逃がすな」

「無駄だと思うよ。あいつは逃げることにしか脳のない一族だ。さて、こいや呪われた子よ。俺はこの怒りをお前にぶつけない」

「死んでも知らないわよ」

クルミはさつきよりも遥かに怒ったように言った。目がつり上がり、気品のとれるような顔ではなかった。クルミの一瞬の一撃で男は倒れた。その一撃で火花が飛び散ったようだった。男は刀の傷もあったが体が熱かった、この熱さは普通の常人は死亡するほどの熱さだった。

「この男、コロオー病に煩っている。よく、この状態で生きていたな」

「どうします。この男」

「色々質問したいが、まずは治療だ。ゲンプ、スザク、医療班に手配しろ」

「は、セイリユウ様」

ダークエルフたちはさっきの傷をものとしなかった。

招かざる客（後書き）

長いです・すいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5755m/>

どこにでもあって、どこにでも無い話

2010年10月10日19時51分発行